

編集後記

社会科学年報第二四号をお届けします。本号はご覧のように、小特集「戦間期の思想」、所員諸氏の個別論文三篇、研究ノート一篇（研究ノートの常識を破る力作の）、および高橋、栗木、石村の三所員の著書に対する書評から構成されています。編集は、矢吹、石塚、私（大谷）の三人が担当しました。私は小特集のきっかけとなった研究会に参加していましたが、この点について若干説明したいと思います。

一九八四年度～一九八六年度に社研グループ研究助成を受けていた「明治国家史の研究」は昨年度の年報第二三号に特集「明治国家史の研究」を掲載しましたが、これが終了した後、その問題意識を継承して「一五年戦争の法的・政治的研究」なる研究会がほぼ同じメンバーによって組織され（代表栄沢幸二所員・法学部）、一九八七・一九八八年度の社研グループ研究助成を受けました。この研究会の目的のひとつは、前回の研究会が明治国家の形成期を対象とすることが多かったのに対して、それが自己の体内に持つ矛盾を明らかにしつつ解体に向かう時期を対象とすることで、その本質を一層クリアーに把握しようとするものではなかったかと思えます。ところがこの研究会は諸般の事情で、通常の三年間の助

成をうけず、二年間で終了してしまいました。しかし、その際ここに見える思想史関係の栄沢、福本論文だけは活字化してもらったことができ、これにたまたま投稿して頂いた内田論文を加えて作ったのが小特集「戦間期の思想」です。グループ研究助成を反映した特集としてはやや物足りない分量ですが、怪我の功名でまとまりの良い小特集となりました。味読して頂き、ご感想を聞かせていただければ幸いです。

さて、本号は偶然の結果ですが、適当なボリュームとすることができました。末筆ですが、編集にご協力いただいた執筆諸氏、公人社編集長大出明知氏、事務担当者等の方々に心からお礼申し上げます。

（大谷記）